

シベリア強制抑留中の体験手記

タシケント抑留

栃木県 秋元武夫

一 八月十五日

宇都宮東部三十六部隊と陸軍特別操縦見習士官第四期生の入隊日が、両方共に昭和十九（一九四四）年八月十五日でした。学業半ばにしての入隊です。

京都の学友二人と宇都宮陸軍飛行学校壬生教育隊に入隊、見習士官としての矜持と帝国軍人としての心構えや覚悟は出来てはいるが、軍務に関してはこれからと腹を据えて取り組みはじめました。最初から滑空機での訓練です。苦勞したのは着地でした。突然、宇都宮飛行学校前橋教育隊への移動、矢継ぎ早に立川整備部隊への配置替え、二月末ごろから航空母艦発進のグラマンやB 29の攻撃に遭い、三月十日は東京大空襲、立川飛行場

周辺は火の海、家を焼かれた国民はどんなだろうと天を仰ぐ。

昭和二十年四月、桜真つ盛りの帝都をあとに満州へと出発して行つたのです。

下関を出て釜山港に上陸、そのころ、米国の大統領ルーズベルトの死の報があり、瞬時勝つたような気分になったものの、これから先、寝食を共にした戦友と別々の任地に向つて行つたのです。

私達五人は北進し、内三人は牡丹江へ、残る二人は更に北進して満州第十飛行場大隊（佳木斯）に着いたのです。

満州は広いと聞いていたものの、見渡すかぎりの地平線が丸味を帯びている大平原、汽車が進むにつれ、大平原一面黄色だったものが紫色やピンク色の平原に変わるなど、言葉では表現できぬ素晴らしいものでした。

汽車がある時点に来た時、何百本も立ち並んでいた電柱が重なつて一本となつてしまったことです。第十飛行場大隊補給中隊に配されましたが、

あと何カ月後には貨車に詰め込まれ、この広野を黒河まで悲しみの目で眺めることになるうとは夢にも思いませんでした。

更に配置替え、何のため、何の目的での配置替えか分からぬまま第五十七航空司令部(哈爾濱)勤務となりました。

ある日、部隊長室に呼ばれ「機上射手が不足なので内地に帰らぬか」との話がありました。この広大な地、物の豊富な満州に魅せられお断りしたのが、私の運命が大きく狂った源になってしまったのです。

昭和二十年八月一日、又しても公主嶺の第一教育隊への派遣です。集まってきたのは入隊時一緒だった仲間達でした。

八月十五日、天皇陛下のお言葉がラジオで放送されるや隊内は騒然。南朝鮮を目指す穏健派と抗戦派に分かれてしまいました。

私は、抗戦派の五本大尉の指揮下に入りました。千人針や日の丸の旗をあらためて抱く者、下着を

調える者等緊迫した雰囲気が充満した日々でした。満州の九月は寒い。高粱の畑を弾薬や食糧を馬車や大八車に積み、平羅堡や文官屯等を点々と敵対行動をとったのですが、ついにソ連の軍門に下り、奉天(瀋陽)の鉄路学院に收容されてしまったのです。

入隊したのが昭和十九年八月十五日、敗戦の憂き目に遭ったのは昭和二十年八月十五日でした。

二 虜囚となつて黒河へ

鉄路学院で見たのは、顔を黒く塗り、坊主頭の軍服を着た若い女性、柵を乗り越えようとして射殺された日本兵、地獄です。

十一月はじめ、寒気益々加わる中、家畜同然の取り扱ひの貨車の旅、全く行き先は知らされない。あの女性はどうなっただろう。

到着したのは北満の黒河、目前に黒龍江が茶色の水を満々と湛えゆうゆうと流れている。「あの河を下り日本へ帰るのか?」「河を渡ってソ連に行くのでは?」等々の話が入り乱れる。黒河の町

は日本人がいたはずなのに、建物は壊され、燃えるとおぼしき物は見当たらない。対岸に見える町はブラゴエシチェンスクなのです。

三 国境の町

♪櫓の鈴さえ寂しくひびく…… 誰かが口ずさむ、明日はどうなることか。外套に身を包み、身を寄せ合つて過した一週間。

♪一つ山越しゃ他国の星が ♪故郷を離れて遙々千里 何で思いが届こうぞ

♪明日に望みは無いではないが ♪空は灰色また吹雪

胸を締め付けられる日々を過したのです。

四 ソ連領へ

ブラゴエシチェンスクに上陸する。何と道路は玉石を並べたところへ、石が動かぬ程度にコンクリートを流しただけの道。軍靴での凍て付いた道の歩行は困難を極めました。持っていた靴下を靴の上に履き歩き出したところ、調子よく歩けたのは百メートルほどで靴下は穴だらけ、ぐるりとひ

っくり返してまた歩きました。道の両側にはタバコを口にした子供等が「エー、ヤポンスキー」とはやしたてている。『死すとも捕虜の辱めを受けるな』と教えられ来たが、死ぬ術もなく、また俺一人死んだところでどうなるものか、日本も死んでしまったのではないか。

ソ連では子供もタバコをふかしている。マホルカという粉タバコを小さく切った新聞紙にのせてまるめ、唾液で糊づけして火打石で灯した火で喫煙という手順になっていたのです。

五 シベリア鉄道の旅

貨車に詰め込まれてシベリア鉄道、どこに連れでゆかれるのかわからない。シベリア鉄道の上を走っていることすら知るよしもない。太陽の位置から西の方に向っていることが次第に分かってきたのです。

いつ停車し、いつ出発するのか、水や食糧はいつ与えられるのか、そして用便は、すべてが不定期。汚い貨車は左右二段、各十人の合計四十人構

成の大所帯です。

停車時の用便がまたひと骨折りでした。

小用の時は降り口からですが、風の向きによっては飛沫が車内に飛び込み、おそらく後の車両にも迷惑をかけたことと思います。何百の車両、何万人の日本人が停車時に使用したのか。下車した所は糞の原。用便中に貨車はゴトンと動き出す。慌ててズボンを上げながら仲間に引き上げられる者、糞を踏みつけたまま貨車に駆け込む者——何たる取り扱い——こんな生活が一カ月も続いたのです。不潔そのものの貨車。蚤と虱との同居です。シャツを床に広げ、縫い目に並ぶ虱の卵を拇指の爪でこするとパチパチと音を立てて潰れます。

誰かが「あつ、海だ！」海だとしたら日本海？もちろん太平洋が見えるはずはない。もしかしたらバイカル湖か？ そうだったか！ 俺達はモスクワに向って走っていることを確認させられました。夜の帳がおり、そして夜が開けてもまだ湖畔を走っているではないか。どの程度の速度か分か

らぬけれど、バイカル湖南端を通過するだけで半日、いや、もつとかかっているかも知れない。更に西進することしばし、今度は南に向って走っている様子。今考えると、ノヴォシビルスクかオムスクからタシケントに向ったと思われます。

第一次大戦の時、バイカル湖の氷上に鉄道を敷き大量の兵輸送に当たったが氷が割れ、多くの若者が湖底の藻屑と消えた話を思い出しておりました。

六 収容所での初仕事

タシケントに到着したのが十一月末であり、シベリアに比べ寒さの厳しさは少なかったと思いましたが。アフガニスタンの北の方に位置し、砂漠の中の大都市でした。

荷物をまとめて下車してどのくらい歩いたでしょう、収容される家は煉瓦作りの窯でした。形はうまく表現できませんが、大きめの電車五両くらいを楕円形に繋いだものと言えばおわかりいただけるでしょう。中央には通路、その左右に二段に

造られた木のベッドがあり、今後何年生活するか分からぬ私達の住まいであったのです。

最初の仕事は貨車への砂糖大根の積み降ろしでした、疲労と空腹の身には絶好の食べ物でした。かじりついたまでではよかったです、その味はいがらつぽく咽がひりひりなのですが、飲み水は見当たらず大変な目に遭ったことでした。

七 煉瓦作り

煉瓦作り作業は三交代です。先ず山を爆破し、この土をターチカ（鉄の車の一輪車）で細い鉄板のレールの上を運ぶのです。

この赤土には石等の雑物の混入はなく、すこぶる煉瓦に適した土でした。この土を水で練り、針金で一定の形に切りベルトコンベヤーで流すと、待ち構えている作業員達が両手でそとと取り上げ棚に並べるのです。（一交代のノルマは一万五千個）針金が切れたりすると大変なことになるので

す。

次は、乾燥した煉瓦の窯への搬入もまたターチ

カを使います。何日かかかって焼き上がった煉瓦の窯出し。熱い煉瓦を取り出す度に立ち込める濛々たる粉塵。ノルマ達成のため、二段三段とターチカに積み重ねての搬出はたちまち手の皮がはがれてしまうのです。葉はなし、もちろん休めず。

誰が考えたか、ベルトの切れ端で煉瓦ばさみを作ったのでこの問題は解決したのです。窯の奥に入るほど熱気は強く、粉塵もひどい。マスクは無し、入浴はままならず、手立てのしようがないのです。そのため、肺を病み倒れた戦友がどれほどいたのだろうか？ 復員後もこの病で苦しんだ戦友もおりました。

八 作業中見たものなど

土の運搬作業中、人骨が出て来ました。ハイヒールらしき物も出ましたが、握ると形が崩れてしまいました。人骨を集め髑髏船の旗印を作ったこととは一つの慰みであったかも知れません。時に頭蓋骨の中に金歯を見つけ、はてこの地は？と皆と話し合ってみました。ひよつとすると帝政ロシア

崩壊の折、貴族たちが殺され埋められた所ではないか？と。真相は全く分からぬまま、この金歯でソ連の作業員とこっそりパンと交換した人もあったように記憶しております。

九 ラーゲルでやったことなど

一 パン分けは、班員が正面から右から左から二階から監視されている中で行われます。その目の鋭さは異状そのものでした。

二 ラーゲルは虱と南京虫との同居であり、暇あるごとにこれらの退治でした。

三 野外作業の獲物は砂亀です。水掻きは無く、亀を横にして石で叩くと簡単に割れ、身を刻んで汁に入れましたが、滅多には口に入りませんでした。

四 演芸部が出来、早くダモイが出来るよう熱を入れる人も出て来ました。三交代労役の合間をぬっての練習だけに、その骨折りは並み大低のものではなかったはず。どこでどう調達したか、昔風の扮装をしての芝居は好

評でした。私も一時期女装して「秋田おぼこ」を踊ったことがあります。

五 室内でタバコを吸ったり、何かに違反すると牢に入れられます。煉瓦の牢は日本人の手で造られ、目立たぬ所一つだけ煉瓦が取り外せるようにしてあったそうです。それは入牢者の状況把握のためのものだったようでした。多くの人は出牢するのですが、時には応答がなく、どこかに連れ去られてしまった戦友がいたという話も聞かされました。

十 いよいよダモイ

このような生活三年、ダモイの声がかかっていた所持品検査。もう捨ててしまったはずの見習士官の階級章、そして戦友の西さんは天皇陛下の写真が出て来てしまい、ダモイ延期です。同部隊の仲間は復員船へ。二人はこの先何年間あの重労働を！涙も出ない。悔しい、情けない。でも幸いというか、半年後の昭和二十三年十一月、ナホトカに停泊の復員船明優丸の姿を遠く見つつ最後の所

持品検査です。寒さの中、上半身裸体も気にならない。乗船、明優丸はゆつくりと港を離れて行く。ナホトカ港が見えなくなるころ、在ソ中、赤化へのお先棒を振った何人かがデッキに引き出され、吊るし上げられました。その凄まじさは、三年余にわたったうっ憤の爆発であり、あわや日本海に投げ込まれるかと思われる事態もあつたのです。

十一 懐かしい日本

舞鶴港が見えはじめました。戦友の西さんの姿はナホトカ以来見かけていない。舞鶴港の緑に近づくの眺めつつ、ナホトカにたどり着きながら日本の地を踏まずに亡くなられた方がおられたという話を思い出し、百点満点の喜びを味わうことは出来ませんでした。

舞鶴港で出迎えて下された方々の温かい眼差し。しかも私達だけでなく、何千何万の帰国者を慈しむ心に加え、箱庭のような舞鶴港、白衣の看護婦の清々しい立ち居振る舞いの日本女性。ソ連の女軍医が尻の皮を引っ張って健康診断をした時の雰

囲気とは雲泥の差以上のものを感じました。また、女性のいなかつた世界からはい出して来た我々には心休まる感激そのものの姿でした。

上陸から何日間は検疫期間です。その時一人千円の小遣いが渡されました。千円という金額は、私の日本にいたころでは、ひと財産でした。これでお土産が買えると喜んだのも束の間でした。タバコ一個「憩」が四十円、「羊羹」一本百円には目が飛び出る思いでした。舞鶴には妹からの手紙が届いておりました。食らい付かんばかりにして読み、荷物の中にしっかり収めたはずでしたが、いまだに見当たらぬのが残念でなりません。

十二 舞鶴をあとに

山陰線に乗り花園駅へ。母校がある花園、わがままを言った下宿の神部マサさん、下宿を去る時神部さんから頂いた抹茶碗は今家にあるだろうか等思っている間に京都駅に着いてしまいました。

ここで多くの戦友が乗り換える。周りには東海道線で東京方面に向う人はほんのわずかです。車中

で夜を過し東北線に乗車すると久し振りに耳にした関東弁。昼近くに汽車は宇都宮駅に滑り込みました。車窓に多く飛び込んできたのは、「お帰りなさい、秋元武夫君」の幟でした。義兄安斉良治氏と姉マサの持ったものでした。話はしたい、声にならない、時間はない……。「そのうち会おう」の義兄の声を胸に汽車は氏家駅へ。駅では弟が迎えてくれました。自転車で喜連川の家に着くと、玄関には父母と妹が手を振っての出迎えです。妹に後で聞いたのですが、床に伏せていた母が私の復員の報を聞くや床から跳ね起き、床を上げてしまったとのことでした。

十三 我が家

先ず入浴、思い出したのはソ連の風呂です。ダモイの一年くらい前だっただろうか、風呂が造られました。嬉しかった反面、これはすぐには帰れないぞとの感を深め、寂しさが強烈に身体を駆けぬけたのです。

風呂から上り久し振りの着物です。更に驚いた

のは、ちやぶ台に山と準備されたお寿司等のお料理です。日本は戦争に負けてもこんなうまい物を食べているのか？ 日本はやはりいいなと思いつつ遠慮なく平らげました。

次の日からは粗末な食事となりました。妹の話によると、「兄さんが帰ったら、その時だけでも御馳走しよう」と、少しずつ貯えたお米によるお寿司だったのです。

二日ほどゆっくり休み、家の周りを見て歩きまわりました。家の前の二反歩ほどの稲が刈られておりません。十一月も半ばになるうとしておりますので稲刈りに手を出し、収穫も終わりました。両親共に喜んでくれましたが、母の目は私の異常に太ってしまっていることを心配し、医師行きを勧めてくれたのです。家計の実情が理解できつつありましたので「はい、それでは」と言う訳には参らず、役場に相談致しました。「復員を証する何かがあれば」とのこと、復員船明優丸乗船の証を示して医療費は無料となったのです。結果は、栄養失

調と肺門リンパ腺炎との診断に、復員の喜びは一気に吹き飛んでしまいました。

昭和二十四年、二十五年は、親の竹の子生活に頼りつきりになってしまったのでした。当時の父の恩給は月四百円くらい、そして米一升がやはりそのくらいの値段であったように記憶しております。復員時の一千円の小遣いは貴重な大金だったのです。

病が癒えて就職したのが喜連川町農業共済組合で、事務長は岡本素人さんというソ連抑留経験者のお世話によるものでした。

十四 教職の道へ

父は教職に身を置き、地域社会や政界人との関係などに苦勞していた姿をつぶさに見ていた私は、教職以外の道を選ぶ考えでおりました。祖父の生活や考え方は大きな影響を私に与えてくれたのです。祖父が版籍奉還により養蚕業の道に進んだことです。祖父は私に「衣食住は生活の基盤であり、その中の衣を選んだ」とのことでした。そして私

は、京都高等蚕糸学校に入学したのです。

昭和二十七年春ごろから母は病に、次第に最期と思われる状況が見え始めました。床の中から「武夫、教員になってくれ」と、教員の大好きな母は何度も言うのです。

ある日、栃木県小中学校教員募集の広告を目にし、可否は別として試験に臨んだということだけでも安心するだろうし、また孝行の一つかとも考えました。試験科目は国語と数学だったと記憶しております。午後は面接官三人による面接です。

「秋元さん、憲法九条ご存じですか」

「知りません」

「憲法九条は、戦争放棄について定めたものです。これについてあなたのお考えを聞かせて下さい」

「日本は強い軍隊を作り、ソ連や米国に対して処すべきです」

三人の面接官はお互いに顔を見合わせ、

「面接はこれでおわります」

おそらく不合格だろう、止むを得まい。好きでない職業の試験であるうと失敗は気持ちがよくない。前々から思っていた警察予備隊なら、旧軍隊の階級も加味されるのではないかと考えていた時、思いがけない教員採用の通知が届いたので。嬉しい気持ちと困った気持ち……母にはすぐ報告しましたが、復員してからの身体状況では警察予備隊の仕事に堪えられるだろうか、せつかく採用になったのだし、母も大喜びなのだからと決断するのに何日かを要しました。

辞令交付の時の訓示は、「今回採用になった皆さんの中には年配の方もおられますが、若くても経験のある先生がおります、心して勤めて下さい」と、三十歳を過ぎた基陸軍大尉と二十七歳の私、あとは二十一〜二十二歳の若い採用者でした。

辞令を手に最初の勤務校、栃木県塩谷郡片岡村立片岡中学校に昭和二十七年九月一日に着任したのです。以来、昭和六十三年三月までの教員生活でした。

母は私の教員生活を確認し、昭和二十七年十月二十日、黄泉へと旅立ったのです。

五十八歳でした。

十五 捕虜の思い出

暖をとる術なさ黒河星月夜

異国の灯ほのかに見えて星月夜

”捕虜“のみの黒河の街や星月夜

凍て初めしバイカル湖見る貨車の窓

ダモイいつ厳寒の地の煉瓦とり

ダモイとは気休めの語か冬来る

パン分けに鋭き眼懐手

正月や”捕虜“は一椀ゆるき粥